

夕方渋谷百軒店

シブヤ ヒヤツケンダナ

むせぶやうなトランペットを聞きながら
この街とも長いつきあひだなと考へた
入り口から三十メートルはつまさきあがりのだらだら坂
南北三本東西二本の幾何学的な街路にすぎない
思ひ出の中では迷路めいた妖気がただよつてゐる
昭和初年小学生だつた僕はそこで鯨を見た
中央通りに見世物小屋があつて
波間に勇ましく泳いでゐる鯨の大看板が出てゐた
入場料五銭をはらつて入ると
板の台の上に二メートル位の乾燥した鯨が置いてあるだけだつた
仕方ないから突つ立つた尾にさはつて帰つた
「この子の手袋はどうしてこんなになつてもなまぐさいんだらう」
母が言つてゐた
僕は知らん顔をしてゐた
芝居小屋もあつた
一人の僧が悩みに悩んで瀧つぽに身を投げる
岩石のあひだに落ちた時
「あ あ さうなんだ ドーゲン 只今 さとりました」
道玄だか道元だつたのかはわからない

ジャズといふものは意識をいろいろの層に分けてゆらせる
外套のポケットの中で僕の五指が妙な動作をしてゐた
女のからだをまさぐつてゐる
手のひらが濡れてゐるのにも気がついた
存在しないのに明確に在るものをもてあそんだ
ああ シブヤ ヒヤツケンダナ
燈火のにぎやかな道玄坂を下り渋谷駅の方へ歩いて行つた
「あなたの手はどうしてへんなにほひがするのでせう」
さう言つてとがめられることもあるまい